



Title	K. A. ポーターの「昼酒」について
Author(s)	大井, 浩二
Citation	大阪外大英米研究. 1961, 2, p. 86-99
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/98933
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

K. A. ポーターの「昼酒」について

大 井 浩 二

キャサリン・アン・ポーターの「昼酒」(“Noon Wine”)は1937年に書かれたもので、中篇小説の形をとっている。一般に彼女の作品としては珍らしくドラマチックな事件を取り扱ったものとして知られており、彼女の傑作の一つに数えることができよう。『アメリカの短篇小説』の著者レイ・B・ウエストはポーターのすぐれた作品として「花咲くユダの木」, 「青ざめた馬, 青ざめた騎手」, 「死の宿命」の三つをあげてはいるが、この「昼酒」も彼女のキメのこまかい手法や構成力のたくみさを示すものとして、高く評価することができる。内外の英語教科書に広く採用されていることも、その一つの証拠といえよう。

ここでは専ら「昼酒」の作品分析にのみ注意を集中することにしたい。彼女の全作品系列の中でいかなる位置を占めるか。「昼酒」にあらわれたポーターの思想はいかなるものか、などという疑問には一切かかわりを持たないことにしておく。彼女のような作家の場合、個々の作品の分析解釈こそ第一に重要であって、この操作ぬきに一つの展望をこころみすることは危険であるばかりか、全く無用なものであるからだ。

「昼酒」の梗概を書くことは、一見簡単なようであって、決してそうではない。僕の言葉に直してしまえば、ポーターがさり気なく置いた踏み石を全く無視することになり、その意味を見失うことになりかねない。とにかく、物語はこうである。ある日突然のこと、一人の風来坊がテキサスの片田舎にあるトムソンという男の農場に現われる。このヘルトンと呼ばれるスウェーデン人は全く口を利かない変人のかわりに突に勤勉な作男で、トムソンの農場ははじめてヘイするものとなる。10年ののち、再び一人の別の男がこの農場を訪れ、主人の

トムソンに、その作男が兄弟殺しの、しかも狂人であることを告げる。トムソンは、自分でも説明できない理由から、有能な作男を捕えようとするこの密告業者ハッチを一撃のもとに殺害する。裁判の結果、正当防衛で無罪となったものの、近所の間人はトムソンを殺人者と考え、妻子までも彼を信用していないことがわかった時、彼は自殺してしまう。

当然のことながら、この物語の興味はトムソンの殺人と自殺という二つの事件にある。テキサスの片田舎に起ったこれらの出来事に弥次馬根性をはたらかせて、一つの経過報告書をものしようというのが、ここでの僕の役割であることを先ず明らかにしておく。

この物語全体は八箇のセクションより成っているが、これを大きく三つの部分、更にいえば「三幕」にわけることが出来ると思う。第1幕は第1節から第4節までで、ヘルトンの登場から、彼と農場主トムソン、更にトムソン夫人、2人の男の子との交渉関係が描かれ、いくつかの「場」にわけられることもできる。第1幕と第2幕との間に、第5節がインターリュードというよりはポストリュードとして挿入され、第1幕の経過を要約し、10年という才月の流れが示される。第2幕は第6節から成り、第2の男ハッチの登場とトムソンの殺人という盛りあがりが見られ、第3幕においては、殺人事件のあとの出来事とトムソンの自殺とが描写されている。おそらくこうした劇的構成はボーター自身が意識したものである。この作品の冒頭に時期を1896—1905年に限定し、場所を小さな南テキサスの農場に指定していることから推察できる。「昼酒」の構成がこのようなものであるとすれば、2つの重大な事件は明らかに密接な関係をもっている。

ところで、その最初の事件であるトムソンの殺人はいかなる具合に発生したか。「その時、あとになってトムソンがいくら一生懸命つなぎ合わせようとしても、決してまともにつながらない事が起こった」と作者は書いている。トムソンは密告業者ハッチのナイフが作男ヘルトンの腹につきささるのを見て、彼を助けるために、オノをふりあげて「まるで食用牛を殺すかのように、ハッチ

の頭めがけて振りおろした」ことを記憶している。ところが、ヘルトンは実はナイフの傷などなく、あとで警察に捕えられたときの怪我がもとで死んでいる。いわば、トムソンはヘルトンが殺されるという「幻想」に基いて行動を起したわけで、「幻想」が殺人の理由になる。全くの偶然によるものであって、幻想殺人事件とふざけて名づけることもできよう。その「幻想」が生れ出た基盤への詮索がどうしても必要になってくる。

言葉をかえていえば、密告業者ハッチの殺害という一見いかにも「外的偶然」とも思われる事件が、いかなる点でトムソンの性格や生活、一般に彼の環境における「内的必然」であるのか。この問題を検討する必要にせまられる。すべての行為に動機がある、などというつもりはない。しかし、そのつもりで読み直せば、第1幕のほとんど無意味と思はれるほどにさり気なく書き並べられた事件の数々が、それぞれの重要な意味をもってくるように思われるのだ。第二幕の殺人事件からトムソンの「殺人の解剖」を試みることができるように思はれる。

この物語の第1幕は、先にみたように、ヘルトンの登場ではじまるのであるが、主人公トムソンの生活と意見を要約しておくのが便利であろう。

トムソンは平凡な田舎の農場主であるが、重要なことは「口やかましくて誇り高い男」であると紹介されていることだ。およそデリケートな物の考え方とは縁のない男で、日曜学校の教師をしていたエミリーと結婚して、二人の男の子がありながら、仕事には身が入らない。というのも、トムソンは「酪農などやってニワトリのあとを追いまわすのは、女の仕事である」という考えを捨て去ることができないからである。彼の頭の中には、彼にふさわしい仕事とそうでない仕事の分類ができていたのであり、この点について、作者は「彼の注意深く制限された活動分野は、ある意味で、トムソン氏の物事の体裁 (appearance)、神と人とのまえにおける彼自身の体裁とに関連していた。『どうもマトモにみえない』」というのが、自分のしたくないことしない彼の決定的な理由であったのだ」と書いている。

税金を忠実に納め、男たちの間では陽気なトムソンも、妻のエミリーが病身

であるために「人が結婚生活に求める人生の重要な支柱」を奪われていると感じ、無意識のうちに自分の人生は失敗であったと感じている。「トムソン氏は、口には出さなかったが、彼が下り坂であること」を知っていたのである。

トムソン夫人にしても五十歩百歩の意見を夫についてもっている。彼女はトムソンを全く信用できないのだ。彼のいい加減な生活態度、「女の仕事」だというだけの理由でタテのものをヨコにもしない態度が腹立たしい。「彼女は本当に彼にもっと気を使い、仕事に構えて欲しいと思った。夫を信用したかったが、信用することのできない時があまりにも多かった。彼女は明日か、少なくとも明後日には、人生が（所詮は人生は斗いであるけれども）良くなるにちがいない、と信じることを欲した」とポーターは書いている。

こうした夫婦間の感情のもつれ、これらを作者は実にさり気なく書き流して、あとに来る突発的な殺人事件と好対照をなしている。この感情のくいちがいは、たとえば第2節のはじめとおわりの会話とか、あるいは第3節のおわり近くのエピソードに如実に示される。表面的には平和なトムソン夫妻に、あるテンション乃至はわだかまりが強く根をおろしていることは明らかであるのだ。この家庭内の感情のバランスをいかに保つか。これが「昼酒」の基本的な出発点であると僕には思はれる。

ポーターはテキサスの片田舎の平凡な夫婦に鋭い観察の目を光らせ、そこに一つのドラマを展開させようとしている。僕はこの作品が、たとえばわが国の作家でいうならば庄野潤三の作品にみられる夫婦間の危機を捕えているという意味で、この「昼酒」を一つの家庭小説ないしはホーム・ドラマと呼びたいのである。

トムソン夫人は夫に農場の仕事に精出してもらいたいと思い、トムソンはそれが「男の仕事」(man's work)ではないと軽蔑する。この状態がつづく限り、二人の関係は回復しない。トムソンの「気にかけているのは、彼の威厳(dignity)と評判(reputation)とであった」とすれば、この「威厳」と「評判」とを傷つけることなく、同時に農場を繁栄に導いて、トムソン夫人を安心

させる方法が案出されねばならない。

そんなある日のこと、たまたまヘルトンが登場する、というのが「屋酒」の第1幕の状況設定なのである。

トムソンがいつもの調子で投げやりに仕事をしているところに現われたヘルトンは、いきなり「仕事が欲しい」と言い出して、彼を面くらわせる。が、「ああ神様、だれか時には熊手をもって、納屋や台所の階段からガラクタを持って行ってくれないものか」と思っていた矢先なので、渡りに舟と大いに値切ったあとで、ヘルトンを作男にやとい入れる。ところが、見かけの割に腕のたしかなこの男のお蔭で、農場は日ましの向上の一途をたどり、トムソンの笑いは止らぬ。トムソン夫人にしても、ヘルトンの風変りな態度は気に食わないものの、それでも農場の繁栄に御満悦である。つまり、ヘルトンの出現により、トムソンの「威厳」は保たれ、トムソン夫人は安心し、一石二鳥の効果があがるのである。

こうした第1幕の状態は第5節のポストリユードにおいて、ポーターにより明確に説明されている。ほとんど説明抜きに展開するこの物語において、第5節は例外的な部分であって、トムソン一家とヘルトンとの密接な結びつきに作者が特に読者の注意をうながしているものと見てよい。

ほぼ10年の間に農場の雰囲気は一変し、ヘルトンはそこでの生活と切りはなすことのできない存在となっている。

ヘルトン氏は一家の希望であり、支柱であった。トムソン家の人々は彼が好きになった。とにかく、彼を少しでも奇矯であると考えことはなくなった。そして、どうして越していいのかわからない距離をへだてて、彼を善人であり良友であるとみなしていた。

トムソン家にとって、ヘルトンは平和と幸福の実現者であった。少くとも、第1幕冒頭の夫婦間のテンションはヘルトンに吸収される。ヘルトンは彼らの生活の中に完全に同化されたばかりでなく、彼らの世界の「支柱」となっている。が、しかし、トムソン家のいわば「甘い生活」も絶対的なものではない。ヘルトンは

彼らに理解できない人物であり、彼が「善人」であるという絶対的な証拠もない。

ヘルトンはトムソン一家にとっては、時限爆弾的な存在であるといえよう。いつ爆発するかもわからないにも拘らず、トムソン夫妻はそれが爆弾であることを忘れて、その上に自らの世界を構築している。忘れたときにやってくる災害の大きさとそれのもたらす混乱については今更いうまでもあるまい。フレデリック・ホフマンはヘルトンについて彼を「この物語の悲劇的手段 (tragic means)」と呼び、「このことを理解するための根本問題は、彼の意味——彼の彼自身に対する意味ではなく、トムソン家に対する意味がなんであるか、ということだ」と書いている。

ヘルトンという「支柱」の安全性を疑わしめる用意はポーター自身によって周到になされているのだ。たゞそれがトムソン夫妻には見えないだけのことである。たとえば、ヘルトンのハーモニカに対する偏執である。しかも吹く曲はただ一つしかない同じものである。これは彼の異常性格を暗示するものではないか。あるいは、トムソン夫人が彼を教会に誘ったときのあの凄しい表情のこともある。「あの人は他の人と同じ振舞をしないのだから」というのが夫人の感想であった。更にまた、2人の子供がハーモニカにいたずらしたときの彼の激しい叱り方もある。彼女は驚き怪しみつつも問題の核心にふれない。ただ「問題はヘルトン氏の風変わりが他の人とどの位ちがうかをたしかめてから、あの人を気楽にしてやることだ」というのである。トムソンの高慢で無神経な態度と夫人の表面的な解釈（彼女が目が悪く、いつも「目を覆う」習慣のあったことに注意すべきだ）に支えられて、ヘルトンの実体は不明のまま、夫妻の間のバランスは保たれてゆく。

このトムソンの世界は、トリリング流に言えば、みせかけの世界といえるのであり、はじめに触れたトムソンの生活信条ともつながってくる。「みせかけ」(appearance)こそ肝要であると考えたトムソンには、目のまえにある現実に気がつかない。『オエディプス王』や『オセロ』や『タルチエフ』の場合と同様に、このこの「昼酒」の主人公にむかって、僕らは「現実とは鼻の先にぶらさ

がっているではないか。一体なぜに貴様はそんなに馬鹿なのか」と質問することができるのである。結局、第1幕に描かれるのは、ヘルトン足を掛りとして9年の間に構成された「みせかけ」の世界のイリュージョンであり、この「みせかけ」を暴露する何者かの出現を予想しているのである。

第2幕で密告業者ハッチが登場する次第は、第1幕のヘルトンの登場と酷似している。トムソンの農場へ1人のふとした男が前触れもなく訪れてくる。このみずからハッチと名乗る男の姿をみた瞬間から、トムソンは直観的本能的な嫌悪感を覚える。彼の話し振りが顔つき、会話の内容一切が坊主にくけりや式にトムソンの反感をそそる。「腹の中のどこかから、ゆったりとしたにぶい怒りがこみあげてきて、身体全部にひろがってゆく」のをトムソンは感じるのだ。それにしても、この男の目的は何か。

南部特有の暑さにみちた雰囲気の中で、この2人の男はむかいあっている。このハッチと呼ばれる男の態度はいかにも図々しくて食えない。その話し振りは真綿をしめつけるような、あるいは蛇がトグロをしめあげるような印象を与え、決して直線的ではない。世間話からおたがいの愛用するカミ煙草のこと、家庭内の問題へと話題はうつるが、すべてトムソンのカンに触れる内容の発言ばかりである。たとえば、トムソンが彼の病身な妻のことを口にするが、彼としてはこのように病気にかかり易い女房のいることは、その亭主にとっては自慢の種だといいたい程度の自慢話である。ところが、それがハッチの手にかかると、たちまちそんな女房などクタバッタ方がいいという意味の内容にすりかえられてしまう。カミ煙草問答についても同様である。トムソンは常に「誤解されている」と感じ、「この訪問客はトムソン氏を悩ました。彼はトムソン氏の口から言葉をひっぱり出して、それをうまくあやつってコネまわした揚句、トムソン氏自身何を言ったかわからなくなってしまうようにするコツを心得ていた」のである。2人の用いる言葉がちがっていたといってもよい。

しかし、考えてみれば、この手錠をじやらつかし、「法」をうしろだてにしている男とは、結局、「現実」の世界からの使者ではあるまいか。彼は密告業

者であり、トムソンの農場にかくれている逃亡中の狂人であり殺人者たるヘルトンを捕えに來たのだ。彼の口から、ヘルトンが狂人であることも、ハーモニカの謎も一切が明白になる。ハッチは一切の事実のデータに武装されている。彼がたてにとる「法」も、いわば「一般性」を抽象化したものだ。トムソンがイリュージョンの世界、仮想の世界の住人であるとすれば、ハッチは最も現実的な世界のそれであるといえよう。2 人の見解が全く相反する方向に動くとしても決して不思議ではない。

たしかに、ポーターがハッチを描写する筆つきは、読者たる僕らにも好い印象を与えるものではない。ウサギのような歯、豚のように邪惡な目。が、この部分の「視点」はトムソンのそれであることに注意せねばならぬ。第1 幕においてヘルトンが常にトムソン夫妻から眺められる存在であったと同じく、ここでもハッチはトムソンから眺められているのだ。ハッチの印象にはトムソンの主観的色づけが施されているのだ。ここで僕らが忘れてならぬことは、このハッチなる人物がトムソンに対して果している機能である。トムソンからイリュージョンを一つ一つはぎとって、ヘルトンというその根本的な存在の実体を暴露する彼の役割の意味を忘れてはなるまい。ホフマンの言を借りれば、「この男は devil's judge の役でここに来ているのであり、その身振りや発言はすべてトムソン自身の性質に対する一種のグロテスクなパロディである。いわばトムソンは鏡にうつるわれとわが身に腹を立てているのであって、揚句の果てには自分自身に耐えきれなくなってしまう」ということになる。

とすれば、その「鏡」に映ったトムソンの姿とはいかなるものであるのか。このことを考えるためには、この物語の題名となっている「昼酒」の意味を考えるのが一番近道であると僕には思われる。

「昼酒」とは、ハッチによって明らかにされるように、スカンデナヴィア地方の歌謡で「一種の酒の歌」であり、ヘルトンがたえず吹いていたハーモニカ曲の題名である。それは朝から気分がいいので午後の酒まで全部飲んでしまう、という小原庄助的な内容の歌であり、ハッチのいうように、「文句は大し

たことはない」けれども、この曲が作中で果している役割は重要である。

朝から酒を呑んで呑気にやる気分、これはヘルトンが農場に来てからトムソンの生活にしみこんでいた気分であったはずだ。ヘルトンの上にあぐらをかいているトムソンの姿はこの曲名によって象徴的に示されている。第1幕において、この単調な曲が次第にトムソン夫妻の生活のリズムの中にとけこんでいくプロセスは、そのまま彼らの生活が向上的に安定してゆくプロセスであったはずだ。いわばこの生活の甘酒はヘルトンによって供給され、トムソンはそれに対して何の疑念もはさむことなく飲みつくし、一種の精神的なアル中患者になっていたのだといってもよい。

このトムソンのまえに「現実」からの登場人物ハッチが姿をみせる。彼の存在は、ただ彼がそこにいるというだけで、トムソン夫妻のヘルトンに対する依存関係（すでに第1幕ではっきりと成立している）を暴露するのであり、トムソンにとって悲劇的であったことは、この依存関係がそのまま彼の生活の本質の根底に横たわっているという事実なのである。ここでハッチのためにヘルトンを奪われてしまえば、10年に及ぶ農場での甘い生活は壊滅する。かといって、狂人であり殺人犯たるヘルトンを手渡さなければ、彼の世間に対する「威厳」も「評判」も霧消してしまう。トムソンの考えたように、たしかに「つらい立場」(an awkward position)なのであり、この窮地から脱出する道はただ一つ、農場からハッチを追放して、彼の生活の基盤たるヘルトンとの依存関係を確保することであるのだ。

ハッチを殺害する寸前、トムソンは錯乱の瞬間を経験する。先にふれた彼の幻想、つまりハッチのナイフがヘルトンにつきささるという幻想である。この幻想ゆえにトムソンは作男ヘルトンを助けようとして斧をふりあげるのだ。このトムソンを助けるため、という殺意は、しかし、意義深いものがある。正確に言えば、ヘルトンを助けるためではなく、トムソンとヘルトンとの依存関係を守るため、更に言えば、トムソン自身を守るために、トムソンは殺人をおかすのだ。ヘルトンという下部構造の上に建てられたトムソンの世界は、ヘルト

ンの「死」によって崩壊する。トムソンにとって重大事は、ヘルトンの死そのものではなく、それによってもたらされる農場の破滅、トムソン夫妻のバランスの消滅であったのだ。トムソンの殺人は、結局のところ、彼の「威厳」と「評判」とを保持し、家庭の平和を守るためであり、第1幕にうち立てられた状況の論理的な帰結であるのだ。

従って、トムソンが幻想によって殺人をするのは、殺人行為、ひいては人間行為一般は論理的な過程に基くものではなく、その時の状況次第の突発事態であることをポーターが呈示しようとしているのだとみる観方は、全く当たっていない。そう考えられるのは、第2幕のトムソンの行動についてだけであり、第1幕の「依存関係」の発生過程を知っている僕らには、この殺人は当然すぎるほどに自然であるのだ。あいまいな言い方をすれば、トムソンの幻想は、この精神的アル中患者の幻覚症状であったともいえる。ともあれ、この事件は決して「外的偶然」などではない。それはトムソンにおいては一つの「内的必然」であったのだ。

「昼酒」の第3幕は、第2幕において惹きおこされた混乱を検討する部分である。

裁判の結果、トムソンは正当防衛ということで無罪になる。これには担当弁護士の入智恵が相当にはたらいている。がしかし、世間の人はいずれひとりとしてそれを信じようとしない。いや、それどころか、トムソン自身が果して無罪であるのか、正当防衛であったのか、ということ信じきれない。裁判の結果にもかかわらず、「釣針のエサのようにもだえながら、トムソン氏の心にひっかかるのは、まさにこの点であった。彼はハッチ氏を殺したのであり、殺人者である。これがトムソン氏の把握しがたい真実であったのだ」とポーターは書いている。

トムソンには何故あの時あの「幻想」があらわれたか、ということが説明できない。自分自身の殺人の動機がトムソンには「謎」として残る。いわば作者ポーターがこの「昼酒」一篇のドラマの中でなしていることは、主人公トムソ

ンとその「観客」たる読者に、トムソンの殺人の動機は何かという「謎解き」の問題を課すことなのだ。その観客たる僕らには、すでに試みてきた分析によって、その殺人がトムソンの生活の内的必然であり、ヘルトンとの依存関係に遠因をもつものであったことを知っている。ここに僕は「昼酒」のドラマチック・アイロニーがあると考えるのであるけれども、僕はあまりに先廻りしすぎているようだ。殺人事件という難問に直面するトムソンに帰らねばならない。

彼の殺人が正当防衛であったということを明らかにするために、トムソンは彼の妻が一切の目撃者であったという口実をこしらえる。彼は彼の殺人の「謎」を解くことよりも、彼の行為の正当化を目指すのだ。運命的な「あの日」(that day)から毎日のごとくやせ馬に鞭うって馬車をはしらせ、トムソンは「彼の立場」(his side of the story)を近所の人に納得させようとするが、トムソン夫人に言はせる口実にもかからず、この試みは完全な失敗におわる。近所の人が彼を信じなかったばかりではない。彼の妻さえもが、彼を恐れているのであり、2人の息子は彼を冷血無残な殺人者としてしか取り扱はない。妻にいわせた口実は彼の役に立たず、最後の抛り所を失ったトムソンは自殺することにより、彼の無実を証明する破目に追いやられてしまうのだ。この点だけにとらわれるならば、トムソンは法を唯一の根拠とし、悪を悪とみる世間の常套的な考えに体当たりして死んでしまうのだ、という社会的なプロテストとして、「昼酒」を読みとることも不可能ではない。

みずからの無実潔白を証明するために死ぬる、といえは僕らはただちにモーパッサンの傑作「ひもぎれ」(英訳名“A Piece of String”)のことを思い浮べる。ある男が路傍でヒモを1本拾う。たまたま近所で財布の紛失事件があり、彼がヒモを拾うのを目撃していた日頃仲のよくない男のために訴え出られる。やがて財布は発見され、彼の無実が明らかになるが世間の人は彼を信じない。事件が拡大したので、彼が人をつかって財布を届け出たのだと邪推され、彼の抗弁は全然聞き入れられない。彼が弁解すればするほど、彼を信じる人は少くなる。彼はこのために疲れ果て病氣となり、死の間際まで自己の無実を主張し

ながら見絶える、というのがモーパッサンの短篇のストーリーであった。

無理解な世間のために死に追いつめられるという点に関する限りでは、モーパッサンとポーターとの間には一つの平行線を認めることができる。がしかし、類似はそれまでである。モーパッサンの場合には、主人公の無罪はいわば客観的に明白な事実である。ここに描かれているのは、世間の大きな意見に押しつぶされる微少な個人の悲劇であるはずだ。ところが、これに反して、ポーターの主人公の場合には、一応裁判においてその無実が証明されているにも拘らず、世間の人に信用されないばかりか、彼自身もみずからの潔白に確信がもてないのだ。彼が口実を設けたのは、そのことのあらわれに他ならぬ。『文学入門』の著者たちが、このポーターの物語は「有罪か無罪かの困難な判定に関するものである。トムソン氏は彼自身の無罪の気持を信じきれなかったが故に、一つの口実 (lie) に救いを求めたのだが、結局、この口実が彼を殺すのである」と述べているのは、この点を指摘したものともみることができよう。

がしかし、何故トムソンは「彼自身の無罪の気持を信じきれなかった」か。何故一つの「口実」に救いを求める必要があったのか。彼は自殺の直前に一通の遺書を書き残すが、その中で「私は決して故意にハッチ氏を殺害したのではありません。ヘルトン氏を守るためにそうしたのです」と断言している。トムソン氏に彼自身の無罪を信じさせないなんらかのコンプレックスがあったとすれば、この「ヘルトン氏を守るために」という点にその原因が求められるはずであり、この事はすでに僕らがトムソンの「依存関係」という言葉で説明したものであるはずだ。

トムソンがヘルトンを守るという行動にでたことは、ヘルトンに依存している彼の世界を守ることであったはずだ。彼が裁判上の作戦として用いた「正当防衛」(self-defense) という手段はこの意味で正しい。ヘルトンを守ることは「自己」を防衛することであったのだ。ところが、彼の期待は見事に裏切られる。ヘルトンが捕えられ、その時の怪我がもとで死んでしまう。彼の死は、従って、象徴的にトムソン自身の死を意味する。あの殺人事件のあと、トムソ

ンの顔が「死んだ男の顔」であり、「彼は死んだ男である」と感じ、子供たちとの食事が「まるで葬式のものであった」のも当然である。「彼は彼の他の生活にとって死んだのであり、その理由のわからぬまま、ある事の終局に到達していた。彼は新しいスタートをせねばならなかったが、どうしていいのか彼にはわからなかった」とポーターは書いている。皮肉にも彼の「自己防衛」は失敗に終り、彼は自殺せねばならない。

従って、彼の自殺は決して社会的なプロテストなどではない。彼の殺人は家庭の平和を守るという善意の行為であったはずで、にもかかわらず、彼の意図に反した結果があらわれる。しかも、問題はそれだけではない。彼が発見したことは、最愛の妻であると思った女性すらが彼を信頼していなかった、という恐るべき現実であった。夫婦の間にある深淵が思いがけなくもトムソンの目前に暴露される。この発見はたしかに彼にとってはショックであった。が、この発見は更にトムソンに別の発見をせまらねばならぬ。それはすでに僕らにはわかっている発見、つまり、彼の悲劇の種子は彼自身の生活設計、「威厳」と「評判」とを重視する性格の中にあったことの発見である。トムソンは本当に生活していたのではなく、生活していたのはヘルトンであり、彼は人生を夢みていたのだ、というきびしい現実認識でなければならない。

がしかし、トムソンはこの最後の認識に到達しない。彼の自殺はあくまでも彼が「無罪」であることを証明するためのものである。無知で教養のない高慢なトムソンは、死の間際まで、「威厳」と「評判」に気をつかいながら、どこちない恰好で銃をあやつりながらヒキ金をひくのだ。その死が単なる表面的な自己証明ではなく、彼みずからが運命の糸をあやつっていた張本人であるということに気づくことなく死んでゆくトムソンの物語は、実にバセティックなものがあるといわねばならない。この点をとらえて、僕は「昼酒」のドラマチック・アイロニーの巧妙さと呼びたいのである。主人公トムソンは、いわばアメリカのボヴァリー夫人であり、しかも彼自身はそのことに気づくことなく、ぶざまな死に方をするのだ。

この物語において、ポーターが「汝自身を知れ」という一つの命題をドラマタイズしているのだ、と言ってしまうと、あまりにも道学者めいた結論になるかも知れない。僕のいわんとすることは、これが自分自身を知らなかった男の、つまり自己認識の失敗の悲劇であるということだ。しかも、この物語を作者がなんの大げさな身振りもみせず、1人の平凡な農場主の生活と意見を中心に、ホームドラマの形式をとることによって、克明に摘き出していることに注意したい。過去の偉大な悲劇にみられるあの壮大さも華麗さも強烈さもない。が、きわめてアメリカ的なドロくさい状況を設けることにより、平凡な人間の平凡な日常生活の中にも悲劇が誕生するということを、ポーターは見事に計算された筆づかいで明らかにしているのである。この作品を読みながら、僕は「トムソン氏は私だ」と感じるのであり、世の中の多くのトムソン的人物はそこに自画像をはっきりと見出すのだ。たしかに『昼酒』は現代の平凡な人間の生活と意見についてのメタファーといえるであろう。

〔参考資料〕

F. J. Hoffman, "Katherine Anne Porter's *Noon Wine*," *The CEA Critic* (Vol. 18, No. 8, November 1956).

Brooks, Purser and Warren, discussion of "Noon Wine," *An Approach to Literature* (New York, 1952).

Blodgett and Johnson, commentary on "Noon Wine," *Readings for Our Times*, Vol. II (New York, 1949).

H. J. Mooney, Jr., *The Fiction and Criticism of Katherine Anne Porter* (Pittsburgh, 1957).

永原誠「キャサリン・アン・ポーター」、『海潮音』16